

校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

一人一人に付けたい力

1. 「自己抑止力(自律の心)」の形成

人間が生きていくには、自分の中にあるよくない考えや行為を押さえる力を自分の中に育てていくことが必要になります。一般的に言うならば、“自律の心”です。それには、古くから心理学では、心の中に“恐い者”をつくることだと言われていています。幼児期は、本当に恐い者だがやがて成長するにしたがい、その中身が、自分を愛し信頼してくれているが故に“裏切れない者”へと変わっていきます。幼少期は他律的なしつけのもとで正義と公正な心を養っていきませんが、成長するにしたがって、悪を閉じ込め正しい行いを実践する習慣を、他からの強制や罰則ではなく、自分の心の中に植え付けていくのです。やっではないことは、自分の心の命令に従ってやらない力をつけるのです。限りなく自律に向かうこの価値を自分の中に形成するプロセスこそが成長へのプロセスであり、いじめをしないためにはどうしても形成しなければならない力です。思春期を迎えている子どもたちに対し、「こうしなさい」、「それはいけません」などという上からの命令に無理矢理従わせる、乱暴で理不尽な他律は、そのリアクションとして確実にいじめを助長します。だから、生徒会活動が有効なのです。

2. 「情緒的共感性」、とりわけ“心が痛む”という心情の育成

いじめをしない、またいじめられている者を助けるためには、相手の“心の痛み”に共感できる感性をもつことが極めて大切であると考えています。生徒指導では、子どもに育てたい資質として、「相手を思いやる心」をあげる学校や教師がとても多いです。それは子ども達の実態からして十分に理解できます。しかし私は、「思いやり心」だけではいじめを防いだり、いじめられている子に手を差し伸べたりすることはできないと考えています。なぜならば「思いやり」は、時には自分の都合（その相手や状況を自分の意思で選ぶことができる）であり、時には“上から目線（思いやりをかけるという言葉に表れている）”となることもあり、特にいじめられている子を救う動機としては弱いものとなるからです。いじめをしない、いじめられている子を実際に助け出す行動の基となるのは、相手の心の痛みに共感し、そのことで“自分の心が痛む”という心情です。相手への「思いやり」を超え、それを見た時には自分の心が痛み、助けないではいられない心情をみんながもつことこそ、いじめ克服にはなくてはならないのです。いじめを平気でやっている子は、このような共感性や感性が全く欠如しています。これらは、環境によって自然と育っていく部分もありますが、意図的な教育によっても育っていくことは間違いありません。教師がそのことを意識しているかどうかが問題です。そして、いじめに対しては、大きな嫌悪感を抱くという感性もまた同時に必要です。いじめられている人間は、「顔で笑って心で泣いて」という心情でいることが多いのです。それを理解できるデリカシーをもっていることは、教師にはとりわけ重要です。

3. 自分から挨拶したり仲間に入るなど、「自発的な行動力」の育成

自分から挨拶できる子、自分の方から話題を提供し話を始める子、遊びの輪の中に自然と入っていく子、これらの子どもは、明るく誰とでも友だちになり、人間関係づくりの上手な子です。同じ挨拶でも自分の方からする子と受けてから返す子、コミュニケーションでも自分から始める子と受けてから返す子とでは、一見それほどの違いは見えないようですが、私は“天と地”ほどの差があると考えています。たいていの教師は、それを“個性”と捉え現状で満足している実態も多いですが、目指すべきは、必要によってはいつでも自分から自発的に行動を起こすことができるという態度の育成です。その態度は素質的な要素もありますが、教育によって十分に育っていくことは優れた実践が証明しています。このような態度を身に付けた子どもは、いじめの加害者はもちろん被害者にもなりにくいのです。キーワードは、“自分から”です。ぜひ、どの子に対しても、何事も“自分から”自発的にできるよう心して指導にあたりたいのです。ところで、その気持ちがあってもスキルが身につけていないために、何事も躊躇してしまい、望ましい対人関係を築けない子どもも多いです。そんな子どもには、スキル・トレーニングも効果があります。だから、SELを行っているのです。

4. 相手を気遣う自分の思いを、的確な言葉にして伝える力の育成

相手との望ましい人間関係を築く上でのキーワードは、「コンプリメント」です。ぜひ、トレーニングを積んで磨きをかけてもらいたいスキルです。「コンプリメント」とは、褒める、ねぎらう、承認する、敬意を払うということです。そのことで相手の心がほぐれ、相談のためのラポートができていきます。一般に人間関係は、自分のよさを心から認めてくれたり自分が誇りとするところを褒めてくれたりする相手と結ばれます。いくらコミュニケーションが活発に行われていても自分のよさやがんばりを本心から認めてくれない相手とは人間関係はできません。子どもであれば、それは友だちでも教師でも全く同じことが言えます。しかし、ふだんの生活において、相手とのコミュニケーションで相手を認めたり褒めたりすることは簡単そうで難しく、意外とやられています。大人でもこのような現状があり、まして子どもたちの学校生活の中では難しく、むしろ相手の欠点や嫌がることを無遠慮にズケズケと言うコミュニケーションが横行しています。そのような人間は「自分の思ったことは相手かまわず何でも言ってよい、自分に正直であるべきである」という誤った価値観をもっているか、精神的に幼く、自己中心性を脱却できないでいると考えなければなりません。それでは、健全な集団生活が維持できず、もっともいじめを生みやすい土壌をつくっていきます。相手とのコミュニケーションでは、自分の思いに、相手の気持ちや立場を考えた「理性のフィルター」をかけてから、相手によく伝わるよう表現を工夫しなければなりません。プラスの気持ちを的確な言葉にして相手に伝えることにより、相手に安心感や相手の承認欲求を満たすことができます。とりわけ感謝の言葉や褒め言葉は、具体的な事実を添えて確実に相手に伝えていきたいものです。話し合いや人間関係づくりをスムーズに行う秘訣です。

5. 相手が喜ぶこと嬉しくなること、それが自分の喜びとなるようになれば最高

「思いやり」という言葉は、人間関係やいじめの問題を考えるには、大事なキーワードになります。学級の全員が思いやりに満ちているならば、いじめは起こらないはずですが。しかし、「思いやり」という言葉の意味は案外、“わかっているようでわからない”のではないのでしょうか。大人でも、どうすることが相手への思いやりなのかの判断に迷うことがあります。迷っているうちに、何もしないで終わることもあります。そこで子どもたちには、「友だちが困っていたら助けよう」、友だちには「相手の喜ぶこと」、「相手が嬉しくなること」をしたり、そんな言葉をかけていこうといった指導が必要になります。それが「思いやり」だと教えていきたいのです。そして、学級集団における個のあり方の理想としては、集団に貢献することや友だちの成功を自分の喜びと感ずることができる子どもです。そうならば素晴らしい人間性を備え、他から絶大な信頼を受けることは間違いありません。

6. 困っている子を見たら心を痛め、“ほっておけない子ども”にしたい

例えば、一人ぼっちの子を見たら、自分の“心が痛む”子どもを一人でも多く育てたいのです。上でも述べた「思いやりの心」を育てるには、相手の立場に立って考えるだけではなく、いかに相手の気持ちを汲むことができるか、とりわけ相手の心の痛みに共感できることが大きなポイントになります。（まさしく人の憂いがわかる優の心です）相手の心情、なかでも弱い立場やつらい立場にいる者の気持ちを共感的に理解し、助けないではいられない気持ち、黙って見ていられない気持ち、特にそれを自分に置き換えた時の「心の痛み」が、相手への思いやりの行為の動機や推進力になっていきます。思いやりの行為は、決して相手への哀れみや安易な同情、自己満足からであってはならないのです。そうしないでいられない自分の心に動かされるものでありたいのです。